



石 黒 修

言語指導の立場から見た 劇あそびの意義について

戦後の教育では、生活とか経験ということが高く評価されておりますが、言語教育、国語の学習指導の面でも、言語生活、言語経験ということがよくいわれます。そうして遊びやごっこ動作化や劇化は、それらを豊かにするものとして、幼稚園や小学校低学年の指導には、特にすすめられております。

いったい、子どもはおとなのまねをしたがるものですか。まね好きです。「学ぶ」とは「まねぶ」（まねる）から出たことばであるといわれますが、子どもたちはまねながら学んでいきます。父母、特に母親、祖母、あるいは兄弟、友だち、保母、教師など、自分の身近にある者のことばや動作をまねておぼえます。もつとも人間はおとなになつても、人のまねをします。普通の「遊び」に対して「ごっこ」はおとなの生活をまねしたも

のですが、その最もよい例は幼児の「ままご」と「だらう」と思います。ごごを敷いて家をつくり、やさしい、果物、菓子、さかななどを、絵にかいたり、あるいは木の葉や木の切れなどで品質や道具に代えたりして、小さなおとなの世界や生活をくりひろげていきます。そうして、子どもたちは、そのようなことをしているうちに、極めて自然にことばを学び、あいさつをおぼえ、エチケットをまねるようになります。ことばと共に動作をし、それをくり返すことによって、ことばづかいの練習をし、それを身につけていくのです。動作化や劇化についても、これに似たことがいえます。

戦後の国語教育で、話しことばが重視され、その行動的表現の学習指導に、ことばを正しく理解し表現できるようにする方便として、遊びやごっこ、さらに動作化や劇化が高く評価されているのは、こういうことのためなのです。これらは、子どもの活動性にかない、興味や欲求をみたし、楽しみながら、無理なくことばを使わせ、これになれさせると

いう点では、たいへんよい方法といえます。人は生まれながらにして俳優であるといつた人がありますが、子どものまね好きなこと、喜んでごっこや劇あそびをすることは、本能とか天性といつてよいでしょう。

ごっこは、劇以前の遊びですが、ことばを使う相手や場、時が与えられます。かくれんぼや石けりなどの遊びは、動作が主ですけれども、これらもことばの学習指導に関連づけ役立てることが出来ます。

子どもは、クマでもウサギでも、何にでも喜んでなります。その動作をします。この動作をことばの学習指導の目的にそつてくふうすれば、効果をあげることが出来ます。

動作化は劇化に比べて簡単です。劇化はストーリーを動作化したもので、劇あそびは劇のまねです。ごっこです。

劇というと、児童劇、いわゆる「子どもしばい」や、年中行事的な学校劇と考えられやすいけれども、本来の学校劇は、舞台装置や服装、扮装などにこつたりしないものです。劇あそびともなればなおのことです。子ども

の空想は、アラジンのランプよりもすばらしい力をもつています。一つの石、一片の紙、一本の棒を何にでもすることが出来ます。そうしてちつとも怪しみません。

遊びやごっこは、自由な、創作的活動ですが、劇あそびは簡単なストーリーから構成されます。しかし、別に筋はなくてもかまいません。ただ多少の約束があり、ある順序によつて行動をし、話をします。そういう点で、言語指導上の意義がいつそう高く、価値があるわけです。

遊びやごっこもそうですが、劇あそびでは他の人といっしょに、全体としての調和を保つて行動する共同作業です。相手や場、時などがはつきり限定されます。前者では動作をしながら話すのに対し、後者では話しながら動作するという違いがあります。遊びやごっこでは、ことばや動作が参加する者、すなわち自分と相手にわかれば、第三者にはどうでもよいともいえますが、劇あそびになると、これを見る者、すなわち第三者にわかることが必要です。そのため、ことばも動作もは

きりと、よくわかるものであることが要求されます。ことばは人にわかることが大いせつです。そういう指導に劇あそびは役立ちます。

劇の登場人物は、人間はもちろん、動物、植物、鉱物などなんでもよく、サルでも犬でも小鳥でも、またさくらでも、山でも、太陽でも、人間のことは話し、動作をします。そうして、ことばや動作は、相手と場と時にふさわしいものが望ましいのは当然ですけれども、高次のものはいりません。気のきいたいい方でなくてよいのです。自然な、自分のことばで、なまりやカタコト、あるいは幼児語のなるべく少ない、方言もあまりふくまれないものが好ましいと思います。できるなら標準的な共通語による簡単なセリフにこしたことはありません。いなか者のことばや、乱暴なことばづかいをおぼえさせることなどはいりません。

たとえば、返事をしない子どもとか、「うん」としか言わない子どもが、劇の中で「はい」と答えることをおぼえたり、「これはな

んですか」ときかれて「本」、「きのうどこへ行つたの？」に「公園」などと、一語文で答えるのを「本です」「公園へ行きました」ということを習ったりするのが劇あそびです。あいさつのできない子ども、しない子どもにあいさつをさせ、態度やエチケットを指導することもできます。

ことばでも、動作でもあまり一定の型にはまつたものや、型式にとらわれたものは感心しません。特別な練習を必要とするものや、長いセリフを暗誦しなければならぬようなものは、特に幼児の劇あそびには不適當です。短い時間で手軽にできる、やさしい、たのしいものであることがたいせつです。

ことばは知識であると同時に技術です。それだけが単独に話されることは少なく、表情や身ぶり、態度を伴っています。それによつてはじめて、ことばは生命をもち、ほんとうに役割を果すことができます。劇あそびはある約束のもとに、ことばに動作の裏づけをするもので、子どもに言語経験を与えるものです。またそれはことばのしつけでもありま

す。

劇あそびでは、たとえば「ありがとう」ということばを、知識としてでなく、相手や場や時という具体的な事実があつていうのですから、生活経験を通しての実際の学習であり、練習なわけです。従つて、これを単なる遊びとして終始させないで、時には指導者が好ましいと考えるところの手業を示したり、説明をあたえたりして、適當な善導も必要だと思ひます。しかし、ここはこうしなさいとか、それはいけませんなどという命令や禁止はできるだけさけるようにして、あくまでも劇あそびは幼児たちにとつて、たのしい、おもしろいものであり、ことばを使う場と機会を与えるものでなければなりません。

幼児の劇あそびには、いわゆる劇のように、見せること本位のものではありませんから、わざと人をおもしろがらせたり、笑わせたりすることはいりません。動作や態度と共に、ことばも自然がよく、誇張も飾りもありません。なるべく日常の生活経験にそくしたことを劇あそびの中にとりいれ、それらを

確実に身につけるようにします。生活の必要に応じて使うことができるように、自分で発言ができ、動作や態度ができるように練習するのが劇あそびです。だから、ことばは簡単で、しかもくり返しが多い方が望ましいわけです。

劇あそびは、いわゆる劇ほどの制約はありませんけれど、やはりかつてな言動は許されません。共同作業ですから、団体行動をすると同時に、自分に与えられた役割を果すことが要求されます。

要するに、国語学習における劇あそびの意義は、ことばの立体化をはかり、言行一致をめざすところにあります。そして、ことばの学習指導を効果的に、興味深く進める一つの手段だともいえます。このようなことを念頭において、幼稚園、保育園での幼児の生活の中に、劇あそびをおりこんでいくことがたいせつです。だから、言語教育、ことばの教育指導方法としての劇あそびは、それが指導目標をもち、学習計画と結びついたものであることが必要です。

(文学博士)